等加速度運動

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
等加速度運動

【Nコード】
N5006T

【作者名】
まなつか

【あらすじ】
「私たち、結婚するんだ」
その香里野の放った言葉が心にズシンと突き刺さった。
もう、なんでもない関係のはずなのに

僕は三年ぶりに香里野、柴田と再開する。彼女は僕と付き合い合っていた頃から柴田教諭のことが好きだった。そして今、僕とわかれた香里野は柴田教諭と交際している。僕は彼らに依頼されて『小説』を書くことになるのだが……。

中学の頃にした先生とのヒトツの『約束』。
桜舞い散る春の青春ストーリー。

00 偶然の再開（前書き）

前作『因数分解』を読んでからこの作品を読むことを推奨します。

Nコード N2361T

00 偶然の再開

僕が彼女と再開する　これは、偶然と言っていいだろう。

僕が書いたあの小説は学校内では話題にならなかった。まあ、話題になっただら問題になっただろう。

軽く、前作『因数分解』の真偽を言っておこうと思う。もし、まだ読んでいないなら先に読んでほしい。N C o d eはN 2 3 6 1 Tだ。

……いいかな？

アレは、07話　ほら、えっちいシーンがあるところだからフィクションとなっている。それ以前までは多少脚色がかかっているものの、殆ど本当のことと言っていいだろう。

とりあえず、僕は柴田を殺していないし、香里野は先生とやっていない。

そして僕と彼女の関係は自然消滅してしまった。

2011年。春

僕は結局こうやってぐだぐだ小説を書きながら高校三年間を過ごして卒業し、大学に入るようになった。あまり聞いたことのない大学だった。

「和義」

あ、僕の名前は小川和義。入試に受かって入学まで少しある時、母から電話がかかってきた。

「母さんか。どうしたんだ？」

「大学合格おめでとう」

「ありがとう」

「そうや、うちに帰ってきなさいな」

「ええ……と」

どうしようか。ここから実家がある田舎まで約3時間かかる。面倒くさい。

「はい、それじゃあ明日、待ってるからね」

「……はいはい」

仕方無しに行くことにした。久々に帰るなあ。

僕は荷物を準備し始めた。高校に通うために借りたアパートは殆ど整頓されていた。ここから大学に通うのだが、なんていうか、パソコンと机、冷蔵庫と、電子レンジなど必要最低限のものしか置いていない。服も制服しかない。まあ、必要ないからな。

そして次の日、電車やバスを乗り継いで実家のある田舎へ帰ってきた。ここをでた三年前と殆ど変わらない。

「んっっ！」

大きく伸びをした。

その横を黒い車が通りかかる。

「……ん？」

そしてそのまま横に駐車した。僕は警戒した。このまま車内へ連れ込まれて誘拐されるかもしれないからだ。

ボタン。扉の音がして運転席と助手席から人が出てくる。

「……っ！？」

僕は運転席から出てきた奴の顔を見てどきりとする。忘れもしない、柴田の野郎だった。

「よっ、小川」「こんにちは」

「なん……で……だ……？」

一步。また一步と引き下がっていく。僕は恐怖に満ちていた。

……こいつら……いったいどういう関係になっているんだ？

「久しぶり、小川」

「かつ……香里野……」

彼女は変わっていた。こつも変わるものなんだろうか。昔あった幼い雰囲気は全く無く、大人っぽくなっていた。そりやそうか……つて今はそこをとやくかく言つつもりはない。なんでこいつらが一緒にいるってことだ。

「私たち、結婚するんだ」

その香里野の放った言葉が心にズシンと突き刺さった。

もう、なんでもない関係のはずなのに

僕らは近くの喫茶店に入った。昔からそこになるのだが、僕は未だ入ったことがなかった。三人で中に入り、一番奥側の席に着く。僕が椅子に座り、彼らがソファに座った。

「あ、コーヒー三つ」

「かしこまりました」

僕はオレンジジュースがよかつたんだけどね。

「……それで、俺らなんだけどさ」

柴田が口を開く。僕は奴の目をしっかりと見た。

「結婚することにしたんだ」

まさか、本当にそういう関係になるとは思いもしなかった。

「どうして……やっぱり、香里野の思いが通じたのか？」

「うん……そうなのかな」

香里野は幸せそうに微笑んでいた。

「あのさ、小川って小説書いていたでしょ？ だから私たちの物語

を書いてくれないかなあ……って思ってたさ」

「そんなこといわれても……」

「お願い！ 結婚の記念に残しておきたいんだよ」

僕は別にプロでもなんでもない。ただの同人作家だ。

しばらくしてコーヒーが運ばれてきた。僕はシュガーシロップを全部入れ、おまけに机にあったスティックシュガーも二本入れ、ミルクを入れた。

「入れすぎ」

香里野に突っ込まれる。僕は苦いのが昔から苦手だった。コーヒーを飲むときは必ず大量に砂糖をいれている。

「……まあ、僕のことはいい。とりあえず、なんで僕なんだ？」

僕がそう尋ねると彼らは顔を見合わせて微笑んだ。

「だって、あの小説小川が書いたんでしょ？」

どきりと心臓が跳ねる。こいつらだけにはバレてはいけなかったのに。

「ほら、やっぱり。だからさ、書いて欲しいんだよね」

僕は唸った。これから大学で勉強もあるっていうのに……。

「まあまあ、じゃあとりあえず話だけでも聞いてくれ。香里野が日記を付けていたから……」

柴田が口を挟む。

「日記……ですか」

「そう、これなんだけどさ」

奴はかばんの中からUSBメモリーを取り出した。

「小川っていつもパソコン持ち歩いていない？」

図星。僕はいつもモバイルPCを持ち歩いていた。それを取り出して机の上に出す。

「この中に入っているのか？」

「うん。それを読みつつ話を聞いて」

Windowsが起動する。僕は四色のそれを見つめながら不快感を感じていた。なんで元カノから惚気話を聞いて小説にしなくち

やならないのだ。

「あつ……!!」

「何？」

「母親に電話入れなきゃ」

「ああ。そのために来たんだ」

「そうだよ」

僕は失礼と席をたつて外に出る。そしてAndroid端末を取り出した。えーっと……

「もしもし、母さんか。ちょっと今日は遅れる。夜になるかもしれない」

僕は電話を切って、桜の舞い散る並木道を見てから店の中に戻った。

「それじゃあ……始めるね。私と柴田先生……うっん、雄哉との物語を」

01 桜の木 4月6日

私と柴田先生が出会ったのは入学式の前日だった。

入学式と行っても私のではない。私が三年生の時に一年生のために準備をするのだ。

忘れやしない。私が丁度ハシゴに登って……何をしていたかは忘れちゃったけど、倒れちゃった。後ろに。

「おっと」

「きゃっ!?!」

私は思わず目を瞑ってしまふ。だけど、誰かが私の背中を押していた。

「よっと」

「うわっ!?!」

私は脇の下を掴まれたと思ったたら身体が宙に浮いた。そして足の裏にアスファルトの硬い感触を感じる。

「……?」

私は振り向いた。

桜の花びらが舞う中、静かに微笑んでいる柴田先生が立っていた

*

っていう、いかにもドラマチックな出会いを果たした私たち。

「どっしょ?」

それを洗い顔で見ている小川に訊く。

「……ベタだな」

「……でしょ」

私はにやりと笑った。彼は肩肘をテーブルに付きながらテキストファイルをスクロールさせていった。

「すみません」

隣にいた雄哉が店員さんと呼ぶ。

「コーヒー、お代わりください」

「かしこまりました」

ふと彼のカップを見るともう空になっていた。私も冷めないうちに飲まないと思い、カップを口につけた。

*

「大丈夫？」

しばし、その状況に見とれていた私はぼやーっとした感じでそこに立ち尽くしていた。

「……え？ あ、はい」

「顔が赤いけど熱でもあるのか？」

「えっ!?!」

次の瞬間額に手が当てられる。思わず目をつぶって一歩引いてしまった。彼は「ごめん」とバツの悪そうな顔をしていた。

「あ、すみません……助けてもらったのに」

「いやいや、いいよ。気をつけてね。ご苦労さん」

そういつて先生は立ち去っていった。私はその背中をいつまでも見つめていた。

心臓は飛び出そうなくらいに拍っていた。

「大丈夫？」

「うわっ!?!」

横から声をかけてきたのは私の大の親友、島原綾瀬だ。彼女は校則違反であるにも関わらずi podを首からぶら下げていた。先生が何を言っても聞かないので最近はおきらめて放置をしているらしい。まあ、こいつに影響される生徒なんてそうそういないから大丈夫

夫なんだけどね。

「へへーん、柴田先生でしょ」

「……え」

私はカーツと顔が赤くなるのを感じた。……っというか、さっきの先生柴田先生っていつのか！

「助けて貰っちゃったもんね。香里野はさー。王子様みたいな感じ？」

「ち、違あ うー！」

「あははは、ムキになってるー」

「もうやめてよ！ 綾瀬！」

私は綾瀬を追い返してから作業を再開した。彼女には仕事は与えられていない。与えたらその分遅れるからだ。

はしごに登りながら後ろを振り返ってみる。 だけど、そこに

は誰もいることなく、桜の花びらが舞っていた。

*

「……なんだこれは。僕と出会う前にこんなことがあったのか？」

「うん！」

私は大きくうなずく。彼はがつくりうなだれて両手で頭を掻いた。

「なんで……なんで僕なんかと付き合っただよ……」

「なんでだろね」

私自身でもよくわからなかった。

「……まあ、今言っても仕方ないか」

「そうそう！ さあ、続きを」

「 お待たせしました」

ウェイトレスがコーヒーを運んできた。雄哉の前に置いた。雄哉

がミルクを入れてから口元に運ぶ。

それだけでも魅力的に感じてしまっなんて、恋のパワーってやつ？

*

そうして準備は去年同様に終わり、皆が帰路につき始めていた。私も鞆に荷物を詰めて帰る準備をする。

「ねえねえ」

「ん？」

綾瀬が私の肩をぼんぼんと叩く。私は振り返った。

「職員室に呼び出し食らっちゃった」

彼女はそんなことをさらっと言う。顔はニコニコ笑っている。もう、こいつは慣れてるんだろ。

「あつそ。いつてらっしやーい」

「やーん！ 香里野冷たい！ 一緒に来てよ！」

「なんで私まで行かなきゃいけないの!？」

「途中までで良いからさ、ね？」

両手を合わせてまで頼まれたら断れない。私もつくづく人が良いと思いつつながら教室を出た。

「どうして今日は呼ばれたの？」

開いている窓を順々に閉めながら訊く。私は窓閉めがいつしか習慣になってしまったらしい。ガラガラと音を立てながら閉まる感触が何とも言えない。窓フェチじゃないけどさ。

「んーとね。香里野が乗っていたはしごを揺らしたのを柴田先生に見つかっちゃってね」

「お前が犯人だったのかよ!？」

「あははー、ごめんごめん」

下手したら死んでいたかもしれないのに何その謝り方は！

「で、それで柴田先生に呼び出してということね」

「そうそう」

「……じゃ、帰るね」

私は窓の鍵をカチリと閉めると踵を返して昇降口へと向かった。

そんな、柴田先生と顔を合わせるなんて……無理無理無理無理！

できっこない！ 恥ずかしいし……。

「待ってよ！ なんで逃げるの？ 柴田先生に会えるよー」

「それが嫌なのよ！」

綾瀬が急ぎ足で追ってくる。

「なんでー？ 顔真っ赤にしてたじゃん。惚れちゃったでしょ？」

「あーもうっ！ 五月蠅いつ！」

私は怒鳴って駆けだした。流石に綾瀬は追って来なかった。私はほっとため息をついて靴を履き替えた。

そこに一つの影がかかった。

「あのさ」

「え？」

どっかで聞いた声……もしかしてもしかして？

私ははっと顔を上げた。

「島原知らないか？」

「わわっ！」

私は飛び上がって後ろにさがった。

「ど、どうした？」

「いいいいえ、なんでもないですよ、あははははは」

「お前……おかしいぞ。大丈夫か？」

「は、はい」

「あ、そっぴや名前は？ 俺、この学校に新しく来た体育教師の柴田雄哉だ」

体育……？ へ、へえ……。

……あ、ああ。私も自己紹介しなきゃ。

私はすっかり上がってしまった。

「香里野ー！ あ、柴田先生」

「島原！ 遅いぞ！ ほら、職員室に来い！」

「うわー！ いやーだー！」

「駄々をこねるな！」

「かーりーのー！ まーたーねー」

私はぼーっとしていた。視線の先は今さっきまで柴田先生が立っていた場所だった。

ゆっくりと立ち上がって、ゆっくりと帰った。

こんなきもち……初めて。

02 小径の石 4月19日

「……なるほど」

彼はほうとため息をついてからコーヒーを口に運んだ。

「んで、続きは……こんなにも空いているのか」

「ん……そう」

だってなんだか飽きちゃったんだもん。

そうは言えなかった。

「それにしても……」

彼は何かを言おうとしたが口をつぐみ、再びパソコンに目を落とした。

することのない私たちはコーヒーを飲みつつ、編集をカタカタしている小川を眺めるか、窓の外の明るい並木道を見るかをするしかない。

ああ 平和だなあ。

*

朝は部活に行くことにした。私の家は学校のすぐ近くにあるためにそんなに早く起きなくてすむ。それでも朝練がある日にはそこそこ早く起きなければならぬ。

学校指定のだっさいジャージを着て家を出る。そして学校まで誰にも会わずに着いた。

「おはよー！」

部室のドアを開けた。文芸部と書かれているプレートは今年変えたばかりでぴかぴかだ。

「おはようございます」

中から返事をしてくれたのはもう一人の部員の中沢さん。下の名前は花梨という。小さくてかわいらしい後輩だ。この文芸部は私と中沢さんとの二人でやっている。

「お、今日も早いね」

「いえいえ……それで、今朝は何をしますか？」

「うーん」

私は殆ど物置状態になっている部室と、二台だけ用意されているパソコンを交互に見ながら考えた。

「掃除しよっか」

「はい。……最近やっていませんもんね」

この部室は元々が物置なので少し掃除を怠ると物がドンドン増えていってしまうのである。

そして私と中沢さんは一緒に掃除をした。

「このくらいでいいよね」

「はい」

「そんじゃ、おしまい」

「お疲れ様でした」

中沢さんはそういつて先に帰って行ってしまった。私への気遣いでもある。私はいつもここで着替えるようにしている。教室で着替えるわけにはいかない。

制服で登校すればいいのかもしれないけれど、今日のようなこともあるので動きやすい服装で来るようにしているのだ。

「あっ……!!」

私が丁度ジャージを脱いでいるところで部室のドアが開いた。

「ちょ！だめっ!」

私はドアに飛びついて押さえ込んだ。そして制服をたぐり寄せて素早く着る。

「……どうぞ」

扉が開き、向こうから

「おはよう」

「し、柴田先生?!」

柴田先生が入ってきた。

「な、なんでここに!?!」

「いや、ここに昨日忘れ物しちゃってさ。体育で使うバトン」

「あ、ああ……」

私は力が抜けてぼすんと壁にもたれかかった。

「そんじゃ」

バトンを手にした先生は部室をあとにした。

私もそれに続いて部室を出た。

*

「おま……いきなりやっぱいシーンかと思ったじゃねえかよ!」

「だって! 本当に入ってきたんだもん!」

「いちいち書くなよ! っていうか見せるか?!」

「だってえ……」

私がふくけると雄哉がまあまあとなだめてくれた。

「まあ……でもこの部室でいろいろあつただけどね」

「い、いろいろ……?」

「そうそう。ねー?」

私が雄哉に同意を求めると彼は渋々うなずいた。

*

家に帰ってから私は”彼”にメールをしていた。

仕方なく……というよりは、実験で付き合っている”彼”だ。

男は一体どんな感じなんだろうかと思ひ、適当な奴　つまり、

小川を落とすことに成功した。

小川とのメールは面倒だった。何か、気持ち悪い。

早くに別れたかった。

それだけど、一度くらいはデートしてやろうと約束をした。

柴田先生……その人だけが私の中を占領していた。

考えるだけで顔がほてる。

お母さんにもからかわれてしまった。……まあ、小川のことにつ

いてはいい顔をしなかったけどね。

明日も会えると良いなあ……。

03 空 4月28日

私に、リアルカレシができた。

名前は小川和義おがわかずよしだ。

たいしたイケメンでもなく、特技もこれと言ってない。いわゆる普通の凡人ってやつ。

そんな彼とつきあい始めたのなんて理由もない。強いて言うなら、研究材料？ 柴田先生との関係の発展になるようにいろいろ都合良く使ってやろうと思ったのだ。

*

ここまで読んだとき、僕の頭は真っ赤に染まっていた。

そんな……僕は本気だったのに。

もう、最後まで読む気なんて無かった。

僕はUSBメモリーを引き抜いた。ガゴンとパソコンから音が鳴る。

「……どうしたの？」

香里野が訊ねてくる。僕はかまわずにパソコンを閉じ、席を立った。

「……ごめん、僕にはできない。あまりにも酷すぎる。そんな気持ちで僕と付き合っていたのかよ！ もう、忘れた記憶を掘り返さないでくれ」

「ごめん」

「もう 忘れたはずなのに」

僕はそのまま喫茶店を出た。

途端、目眩を感じた。長時間座っていたのと、外があまりにも明

るく感じたからだ。僕はパソコンが入った鞆を片手に近くの河原まで歩いて向かった。途中、何度かため息をついた。なんで香里野は今になってあんな酷い文章を僕に見せようとしたのだろうか。

「あ」

勘定を忘れていた。まあ、柴田が持つだろうと僕は自分で納得して考えにふけた。車数が少ない道路を歩く。ゆつくりと包み込むような春の風。僕は考えるのをやめて空を見た。

「ああ……変わらないなあ」

思わずそうつぶやいてしまうほど変わらなかった。思わず立ち止まってしまふ。

この空の下で僕らは出逢い　みたいなことを言うと青春ドラマみたいな感じか。実際はそんな爽やかな感じじゃなくてどろどろしたものなだけだね。

蒼い空、白い雲。

周りに高い建物がないせいか、やけに広く感じた。その大きな空に吸い込まれそうな感じになったとき、

「よ、小川。帰ったのか」

「ん？」

そのどこか懐かしい声に僕は我に返り、後ろを振り向いた。

「伊藤！」

「はは、そんなに驚くなんてな」

久々に見る親友の姿は変わらなかった。どこかぼやんとしたような感じなんて特に、だ。

「どうしたんだ？　お袋さんに会いに来たのか？」

「……ん、まあ、そんなところだ」

「家と反対方向へ向かってるじゃないか」

「ちよつと、河原に行こうと思ってるね」

「お、いいね。俺も行こう」

「ああ」

そして僕らは話しながら河原へと向かった。

「高校は……入れたのか？」

僕は彼を心配していた。高校さえ行けそうにない学力を持った彼だ。ちなみに僕は普通の高校へ行った。こんな田舎にあるはずないから下宿をしながら通っていた。

「ああ……なんとか。今は、こういことさ」

彼はそういつて両手をひらひらさせた。つまりは、そういことか。

「悪い」

僕が詫びると彼はいいよいよと言つて空を仰いだ。

「俺さ もう、死のうと思うんだ」

「は!？」

「こんな俺が生きていてもしょうがないしな。親にも迷惑掛けるしさ」

「何こいつ、爽やかな顔をしながらさざらりと言つてんだ!？」

「あーっ、空は蒼いなあ」

*

彼は私のことではいっぱいになっているみたい。ははは、騙されるなんて感じてないでしょうね。

私は柴田先生一筋なのに。

今日は柴田先生と一緒に帰った。下校の見回りのついで……といふことにしてある。先生は嘘をついてまで私と一緒にいてくれるのにはわけがあった。昨日 つまり、4月27日に私は柴田先生のせいで怪我をしそうになったのだ。先生が抱えていた重い荷物をうつかり落としてしまって私に当たってしまったのだ。そのことを気づっているのだろう。

今、隣にいるのは柴田先生ただ一人。唯一、訊きたいことがあった。それを訊こうか訊かないかで迷っているとすぐに家に着いてし

まづので思い切って訊いてみることにした。

「柴田先生って……その……カノジヨとかいますか？」

「は……？ 何をいきなり……」

彼は明らかに困惑したような表情をした。

「つ、付き合っている人とかいるのかなーって……」

私は真正面から先生の顔を見ることができなかつたので視線を地面に落としながら訊いた。

「いや……いないよ」

「ホントっ!？」

私はぱつと顔を上げた。

「う、うん……」

よかつたー！ 私は心の底からそう思った。

「先生！」

「ん？」

私はずっと空を見上げた。

「空が 空が、こんなにも、蒼いです！」

「……ホントだな」

その短い、数秒にも満たない時間が私にとっての永遠だった。

04 水 6月24日

暑い。なんでこんなに蒸し暑いんだと思うような平日の午後。私は外に出て、柴田先生の姿を探す。太陽光を反射するグラウンドがまぶしい。照りつける日差しが暑かった。

「おう、百瀬」

後ろの昇降口の方から声がした。柴田先生が屈んで靴紐を結んでいた。私は上から彼を見下ろすような形になって少し興奮してしまった。決して、Sではないはず。

「あの……」

やばい、話すことがない！ っていうか、何話せばいいのかわからない！

「えーっと……今日も良い天気ですよー！ あ、あははは！」

「……」

柴田先生、明らかに不審そうな顔をしている。

「あ、今日は何するんですか？」

「……お前、話聞いていなかっただろ」

「へ？」

「今日は全員プール掃除だ。プールに集合だぞ」

「ウソ!？」

「ホントだ。体育教師が嘘なんてつくか」

やっべー、そっいえばみんな裸足になっていたような気が……。

私は思い出して赤面してしまう。ドジ踏んだあ！

柴田先生は「はあ、やれやれ」と言った感じで立ち上がり、手招きをした。私は首を横に傾げ、彼のあとを追う。何処に連れて行かれるんだろう。

「……えっ」

私は思わず声を漏らしてしまふ。そして不審に思いながらも先生
のあとを追って、その中に入って行く。薄暗くて足下がよく見えな
い。

「体育倉庫で……何するんですか？」

「何するって……？」

やべ、いきなり『する』って何考えてるんだよ、私。

「あ、いや……別に……」

「うん、ちよっとね。……これ、持って」

「あ、はい」

私は奥から出されたそれを受け取った。バケツだ。そして先生も
バケツを持って奥から向かってきた。その時

「るわっ!?!」

ガツッと音がしたかと思うと急に目の前の先生の身体が前のめり
に倒れ込んでいく。私は避ける間もなく押し倒された。

「った　!」

私は運良く石灰の袋の上に倒れ込んだので幸い頭は無事だった。

「……ご、ごめん、百瀬」

「　　って先生!?!」

あああああ、ああ、アンタ！　何処に手をやってんの！

「ちよ……先生……!」

「わ、あ、え、あ！　ご、め、ん!」

先生はぱつと私の胸から手をどけると立ち上がった。私の胸はど
きどきと音を立てていた。

「ごめん！　百瀬!」

「……別に、いいですよ」

先生なら……別に何されたって……っていうのはまだ早いか。

「ごめん」

先生は完全にしよげていた。

「いいですから、早く行きましょう。怪我もありませんでしたし」
私は落ちたバケツを持つと体育倉庫を出た。……やばいやばいや

ばい！ 心臓がばくばく言ってるよ！ このままプール入ったら絶対溺れるって！ …… あ、いやでも先生が助けに来てくれるのかも。妄想にふけっていると先生がバケツをひょいと取り上げた。

「悪いから、俺が持つよ」

「別に、気にしていませんよ」

「うん、だけど今回はそうさせてくれ」

男の事情って奴ですか。私は先生の親切を快く受け入れると一緒にプールの方へと向かうのであった。今年も暑くなりそうだなあ。

*

しばらくしてから伊藤はすつと頭を下げるとこつちを向いた。

「河原、行くんだろ？」

「ああ……」

会話も少なく、僕と伊藤は河原へ向かった。さーっと風が吹く度に辺りの草が音を立てて揺れた。

そして河原についた頃、大分日は傾いていた。川のせせらぎの音だけが僕の耳を占めていた。伊藤はそこに落ちている平たい石を拾うと水面に向かって投げた。

しかしその石は一回も跳ねることもなく沈んだ。

消え入るような表情で伊藤はそれをただ見つめていた。

「こういふとき。成功せずに、堕ちていくだけの人生。理不尽な人生。俺はもう、生きる気がしない」

僕は何も言えなかった。彼の儂げな表情が僕に何も言わせようとしていないのだ。

「はあ…… だけどさ、どうせ死ぬなら何かやりたいじゃないか？ 命を懸けた何かを」

「何を…… するんだ？」

「頭の中ではもう決まっている。けどお前には話せない。悪い」
彼はそういうともう一度石をつかんで叩きつけるように川に投げ込んだ。

「楽しかったよな。学生生活って。今思うと先生がぎゃーぎゃー言っていたのが愛情を感じるよ」

「そうかもな」

僕も石を拾うとそれを水面に叩きつけた。

「僕はあまり良い思い出はなかったな」

「百瀬のことか？」

「うん。結局自然消滅した。それで今日」

「婚約したことを知ったんだろ？ こころじゃ結構有名になってるからな」

「そうなんだ……」

「……ま、仕方のないことだ」

ぼんと音を立てて石が一つ、川に落ちる。

ピーヒョロロロロロ 川のせせらぎに乗るようにウグイスが歌声を上げ、森の方から飛び立った。既に朱く染まり始めている空に向かって。

「あー、あちいー」

私は制服の胸元を開いてうちわで風を送り込んでいた。

「ううー……」

中沢さんはそれでも真面目にパソコンに向かって文章を打ち込んでいた。何を書いているんだろうか。私はちよつと気になってパソコンの画面を覗き込んだ。

「あ、ちよつとやめてくださいよー」

「いいじゃんいいじゃん」

おつ……これは……！

「あんたもエロねえー」

「いやっ！ ちがっ！ これはっ………！」

中沢さんもやつぱりお年頃なのねーとかどうでもいいことを思いつつも視線を外に向けた。夏と言ったら入道雲！ っていうくらい大きな入道雲が浮かんでいた。私がそれをぼけーつと見ているとこんなと部室のドアが叩かれた。

「はーい」

私は重い体をなんとか持ち上げてドアノブをひねった。

「よう」

「あ、先生」

「がんばってるかい？」

「あ、はい」

先生はジャージ姿で首からタオルを垂らしていた。それもまた似合っていてかっこいい。

「ところで……なんのようですか？」

「用もなしに来ちゃいけないかい？」

え……!?

「っていう少女漫画の受け売りみたいなことは言わないから安心しろ」

絶対後ろで小説書いていた中沢さんも固まっただろうな。いまだきそんなんねえよ。

「実は……これを持ってきたんだ」

「はいはい……」

柴田先生が横にあったダンボールから一台の扇風機を取り出した。おと私と中沢さんが歓声を上げる。柴田先生は得意そうになってふっふっふーと笑った。

「どうだ」

「ありがとうございます」

「いいっていいって」

しかし、どこから持ってきたんだろうか。

「校門前の溝に落ちていたんだ」

「え!?! ちょ、それ、やばくないですか!?!」

「大丈夫!?!」

……。

*

僕がぼーっと赤く染まった空を見上げていると突然後ろから押された。

「うわっ!?!」

水しぶきを上げて川の中に僕は落ちた。後頭部に強い衝撃が襲う。とつさのことに何もすることができず、ただただ、沈んでいった。

「伊藤……お前……」

かすかにつぶやいたその声はもう誰にも届かない。耳の中に水が

入ってきて完全に音が聞えなくなった。

(やばい……)

そして意識も途絶えた。

*

「雄哉」

私は喫茶店から出て車に乗り、桜並木を走っていた。隣では真っ直ぐ前を向きながら車を運転している雄哉の姿があった。免許をとってから一年経つが、まだ不慣れなところがあるらしい。減速しつつ私の話につき合ってくれた。

「やっぱり……小川には悪いことをしたのかな？」

雄哉は大きな桜の木の下に車を停車させると前を向いたまま答えた。

「そうだろうな。香里野だって嫌だろう」

「そうかもしれない。」

「私、小川に謝らないと」

「そうだな。小川のうちでも行くか？」

「うん、お願い」

「はいはい」

雄哉は再び車を発進させた。桜並木を進む。どこまでも。

06 夕焼け 7月19日

「先生、私と結婚してください」

そう申し込んだのはいつの日だったか。

私は流れ行く景色をガラス越しに眺めながら回想していた。

確か 小川と付き合い始めて3ヶ月くらいだった頃だったと思う。

そのくらいの時だった。

*

「先生、私と結婚してください」

その声が校舎裏から聞こえてきたのはいつの日だったか。

あの日は夕焼けが綺麗だったのを覚えている。

シヨックだった。

ずっと信じていた人が僕を裏切ったのだから。

柴田の答えは聞かなかった。聞くに耐えられない。僕はその場から立ち去った。

今でもそれは鮮明に覚えている。

まさか まさかそれが現実となるなんて思いもよらなかった。

だけど、それが……

*

夕焼けによってその空間は作られていて、校舎の白い壁を赤く染めていた。

隣の森からヒグラシの声が悲しげに響いている中私は柴田先生に告白した。

「……………それは……………できないな」

「えっ」

返ってきた答えはそれだった。

心がふつと浮き上がるような感覚。脳裏がヒリヒリとしびれる感じがする。

「生徒と教師が……………そういうのはできない」

先生はどこまでも誠実だった。

「だから、お前が卒業して西高校に入ったらいい」

「え……………」

西高校はこの辺りで最もレベルが高いと言われている高校だ。私の学力ではせいぜいその下の下の下の下の下である北高校が精一杯だろう。

「本気ですか？ 無理ですよ」

「じゃあ、俺との結婚も諦めてくれ」

「……………」

「それじゃ」

先生が私に背を向ける。

「私……………行きます。西」

「……………そうか」

先生は背を向けたままそういった。『がんばれ』のヒトコトもなかった。

夕焼けに照らされた先生の背中が私の心を少し苦しめた。ただどなんとしてでも

07 等加速度運動

「いない……か」

私と雄哉は彼の家に行つてため息を付いた。いたのは彼の家族だけ。もうついている時間らしいが着ていないらしい。心配そうに私たちにそういった。

「……帰ろう」

「うん……」

私たちは家路についた。

「……」

無言の中で車を走らせる。外の風景を眺めていると違和感を覚えた。煙がそこらじゅうで上がっている。確かにここらへんは田舎で野焼きとかはするけれど　ここまでだったろうか。

「ねえ、おかしくない?」

「……わかつてる」

雄哉は更に車の速度を上げて私たちの住むアパートに向かった。まだ引越しはしていないがいろいろなものがある。そんなことはないだろうと頭では考えているが、もしかしてと頭の隅でそれが居座っている。

「……っ」

息を飲んだ。

私たちの住むアパートが真っ赤に燃えていた。

雄哉は車を止めて外に出た。車内に煙の匂いがどつと入ってくる。私はその赤い建物から目を離せず、また突然のことに頭が完全に停止していた。

「逃げるぞ」

帰ってきた雄哉はだいぶ苦しそうだった。

「殺せエエエエエ!!!」

その声と共に私の視界から彼の姿が消えた。
なんで、どうして。

私はひとり取り残されて坂を下る。真っ直ぐな道を。

等加速度運動する車でもいずれは止まるだろう。

だけど私の不安は止まることなく等加速度運動を続ける。

雄哉は？

私はただただ、彼のことを想い続けるしかなかった。

目の前には真っ赤に燃える隣町が見えた。

ああ　もうだめだ。

事態は加速していく。

ただ、それは等加速ではなく、急速に。

それを止める術はあるのだろうか。

私は頭の片隅にそんなことを思い、目を閉じた。

07 等加速度運動（後書き）

こんにちは、まなつかです。

なんか変な最終回でしたが、これで本作は完結です。

『止まらない、止められない。』となにか共通点を感じた方もいらっしゃるかもしれません。

きつと 　いつかきつと続きを書く時が来るでしょう。

ひと夏の記憶が更新を停止していますが、ご了承ください。受験勉強で忙しいです。

それでは、テスト期間中ですので、このくらいにて。

またどこかで会いましょう。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5006t/>

等加速度運動

2011年9月14日03時32分発行